

◎ 2018年度同門会 同門会賞受賞

滋賀医科大学 外科学講座（心臓血管外科）

木下 武（平成16年卒）



私は2004年に地元の鳥取大学を卒業後、NTT東日本関東病院の外科レジデントを経て、2006年に浅井徹先生が主宰する滋賀医科大学外科学第2講座に入局しました。早朝から夜遅くまで心臓血管外科の臨床に没頭できる日々を喜んでいましたが、入局して間もなく鈴木友彰先生から「一流の心臓外科医になるためには論文も書かなければならない」と言われ、論文の「ろ」の字も知らなかった自分にはとても新鮮だったことを覚えています。2009年に入学した大学院では冠動脈バイパス手術に関する複数の臨床論文が評価され3年生で学位を頂くことになり、多くの先生からお褒めのお言葉を頂戴しとても光栄でしたが、正直なところ周囲の人が評価するほど自分の成果に満足感を得ることができませんでした。おそらく心のどこかで自分が成し遂げた仕事を基にした論文ではない、と思っていたからです。ちょうどそのころ、薬理学講座の岡村富夫先生が血管の基礎研究をされていると聞き、すぐに門を叩きました。岡村先生は快く受け入れて下さり、私は冠動脈バイパス手術で使用する血管グラフトを対象にいくつかの仮説を立てました。術中に余剰となった小さな血管断片を冷却した保存液に入れすぐに実験を始めるのが理想でしたが、ほとんどの場合は夕方から夜にかけてようやく時間を捻出できるかどうかという日々でした。疲れてどうしようもないときは家で仮眠をとって夜中から実験を始めました。薬理学講座には確立された実験系がありましたが、ヒトの血管は扱いが難しく、半年から1年間は全く結果が出ず、何度も挫折しそうになりました。このたび同門会賞を頂いた論文は American Association for Thoracic Surgery の学会誌で胸部外科領域では最も歴史が長い Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery に掲載されました（Kinoshita T, Tawa M, Suzuki T, Aimi Y, Asai T, Okamura T. Endothelial dysfunction of internal thoracic artery graft in patients with chronic kidney disease. J Thorac Cardiovasc Surg. 2017 Feb; 153(2): 317-324）。これまで慢性腎臓病患者の冠動脈バイパス術の長期成績が不良であることはわかっていましたが、グラフト血管の機能障害との関係性を検証する研究はありませんでした。本研究では、極めて優れた長期開存性を持ち最も信頼のおける血管グラフトである内胸動脈の長期開存性を支える内皮機能のうち一酸化窒素を産生・放出する能力が腎機能の増悪と共に悪化していくことをマグヌス管による張力検査で証明しました。この研究結果が出るまで約5年かかりましたが、acceptの報告を聞いてこれほど嬉しかった論文はありません。同門で共著者の相見良成先生には内皮細胞の形態学的評価方法を教えていただきました。励まし合って文句ひとつ言わずに夜遅くまで一緒に実験に付き合ってくれた薬理学講座の田和先生、秘書さん、皆に感謝です。地道に粘り強く継続していくことの大切さを改めて学ばせていただきました。ありがとうございました。